

父親を対象とする子育て支援

—父親向け活字情報の分析から—

(家政教育講座) 金子省子

Support for Child-Rearing Fathers An Analysis of Handbooks and Magazines for Fathers

Seiko KANEKO

(平成27年7月6日受理)

抄録：父親の子育てをめぐる支援は、母親の負担の軽減や子育て支援の推進という観点からだけでなく、男女共同参画社会の推進、ワーク・ライフ・バランスの実現という点からも、今日的課題となっている。性別役割分業に基づく母親中心の子育てモデルは、子どもの発達環境としてだけでなく親の自己実現という点からも問い直しを迫られているといえる。本研究では、父親を対象とした育児情報に焦点をあて、そこにみられる父親観の検討を行うことで、父親の子育てへのかかわりに関する現状と課題を捉えたいと考えた。父親を対象とする育児情報のうち、自治体発行の父子手帳と父親向け育児雑誌『FQ JAPAN』の資料分析より、内容構成および父親観について分析・考察を行った。父親を対象とするこれらの活字情報は、発行形態や読者層、内容構成上の相違点をもつが、父親観や父親に期待される行動に関しては共通点がみられた。一次的養育者としての父親への期待が示される場合でも、父親については子育てを楽しむことを重視し、これに容易な参加を促す表現を伴うことで母親の補助的な養育者としての父親観が払拭され難いこと、権利としての父親の子育ての視点を明確にしていく必要があることが指摘された。

キーワード：子育て支援 (child-rearing support)、父親 (father)、育児情報 (information about child-rearing)、ジェンダー (gender)

1. はじめに

子育て支援の取り組みには、行政の子育て支援の諸施策だけでなく、企業やNPOなどによるものも含め、様々な活動がみられる。支援の対象についてみると、親などの養育者、養育者と子ども、そして、子ども、という整理が可能である。養育者としては、母親、父親、祖父母など、さらには将来の親となる可能性をもつ青年も、広義には支援対象に位置づける場合がある。近年父親の育

児不安への注目が集まっているものの¹⁾ 実際の支援対象者は母親に偏っている。子育て支援＝母親支援としないことは現在も課題として残っているのである²⁾。諸外国と比較して日本の父親の家事・育児時間の短さ、育児休業取得率の低さなどが指摘されるなか、保育環境の整備、労働環境の改善などの制度面とともに子育てについての意識変革が求められている。

ところで、男性の子育てを取り上げた活動では、1970

年代に、「男の子育てを考える会」の活動がスタートしている。1980年には「男も女も育児時間を！連絡会」（通称育時連）が発足し、労働基準法の育児時間を男性にも認めるよう主張し仕事も家事・育児も男女平等の生活スタイルをめざして例会やニュース発行、著書の刊行などを行っている³⁾。これらは、男女の家事・育児分担や労働の場の平等を求め、権利としての男性の子育てを主張する先駆的な活動といえる。

その後の女性差別撤廃条約批准、男女共同参画社会基本法の成立を経て始動した近年の「イクメンプロジェクト」は、行政と民間の協働によるものとなっている⁴⁾。このように父親対象の活動は、支援対象も、情報の発信者・支援者についても大きく拡大されたものとなっている。また、母子福祉の事業が父子家庭にも拡大され、「ひとり親」福祉としての位置づけを与えられる面もでてきた。

制度面のみならず、子育てにかかわる教育についても変化がみられる。家庭科では現在「親性」や「育児性」というジェンダーにとらわれない用語が用いられるなど、青年期の保育学習はジェンダーに敏感なものとなっている。一方で、養育者の身体的特性が顕在化する妊娠・出産過程と、その後の乳幼児の子育て期において、現状では父親と母親の得る情報や支援には相違がある。母親中心の支援を見直す過程で、父親学級などでの情報提供のほか、父親向けの子育て支援事業がみられるようになっており、自治体のなかには父子手帳のような父親向けの冊子を作成・配布する動きもみられる⁵⁾。

こうした動向をふまえ、父親向けとされる情報源や情報内容を検討することは、養育期待をジェンダーに敏感な視点で検討するうえで不可欠と考える。本研究では父親向けであることを明確にしている活字情報に焦点をあてて検討をすすめる。

2. 研究目的

子育てにおいて適切な情報を得られることは困難克服の大きな手助けとなる。同時に、情報の中には子育てする親等への役割期待も含まれる。

本研究では、父親に対する養育期待が直接的、具体的に反映されると考えられる父親向けの情報に焦点をあて、そこにみられる養育者観を検討し、父親の子育てへのかわり、父親に対する子育て支援の現状と課題について

考える手がかりを得たい。

父親（男性）対象のセミナー⁶⁾やインターネットを介した情報が注目され始めており、これら媒体の変化が情報内容にもたらす影響も今後検討していく必要があると考えられるが、ここでは父親向けの活字情報に焦点をあてて考察しておきたいと考える。

育児書や育児雑誌の読者層は母親限定とはなっていないものの、母親を主としており、一方父親を対象と限定した活字情報は多いとはいえない。そのなかで、父親を対象とした育児書は1980年代後半より刊行され⁷⁾、自治体発行による冊子（父子手帳など）が1990年代半ば以降各地でみられるようになって現在に至っている。雑誌については、2006年『FQ JAPAN』が父親向け情報誌として創刊・継続刊行されている。

3. 研究方法

父親向けの数少ない活字媒体である自治体発行の父子手帳と雑誌『FQ JAPAN』を分析対象とした。内容・記事構成、父親の子育ての意義づけを捉え、父親に期待されている役割と具体的行動について分析した。次にこれら2種の資料についてみていく。

(1) 自治体発行の父子手帳

父子手帳、実際はパパ手帳、育男手帳等名称は多様であるが、ここでは父子手帳と総称する。

2013年7月～9月にかけて自治体のホームページなどを参考にして保育学研究室よりメールを介して協力を依頼した。冊子体の送付協力が得られた11冊を分析対象とした。メールで発行開始年、発行の契機・目的、作成方法、配布方法について回答を得た。

父子手帳は、母子保健法で配布が義務づけられている母子健康手帳とは異なり、全国で発行されて父親が入手できる状況ではない。なお、自治体発行の父子手帳の最初の発行は、1995年の石川県とされているが、都道府県・市区町村などの正確な発行数は明らかではない⁸⁾。

今回対象とした父子手帳の発行状況は、表1のように、2003(平成15)年から2012(平成24)年発行開始のもので、財政上の理由で一時中断し改訂・復活した市がみられるなど、変動があることもうかがわれた。

判型はA5判やA6判で、A5判35ページ前後が多くみられた。母子保健法に規定される母子健康手帳に比べ、表紙、イラストなどの表現方法もバラエティに富んでいた。手

表1. 対象とした父子手帳

資料	名称	発行開始年	判型 頁数	編集制作 発行	配布方法
1	静岡県 お父さんの子育て手帳	平成15 改訂	A6 118	静岡県教育委員会	母子健康手帳配付時・小 学校入学時 HP
2	栃木県 父子手帳	平成17	A5 36	とちぎ未来づくり財団 栃木県保健福祉部こども政策課	母子健康手帳配付時 HP
3	熊本県 すきすき パパ手帳	平成20	A5 32	熊本県こども未来課（パパ手帳作成意見 聴取会協力）	母子健康手帳配付時 HP
4	三条市 ENJOY! パパ手帳	平成21	B6 34	三条市教育委員会	母子健康手帳配付時
5	岐阜県 父子手帳	平成22	A5 44	岐阜県少子対策課（県医師会監修、大垣 女子短大協力）	母子健康手帳配付時 HP
6	愛知県 子育てハンドブックお父さんダイスキ	平成23	A6 44	父親向け子育て読本作成委員会 愛知県健康福祉部子育て支援課	HP スマホアプリ無料配信
7	埼玉県 イクメンの素	平成24	A5 31	イクメンへの道プロジェクト事務局（埼玉 県立大学 兼宗美幸・坂本めぐみ監修） 埼玉県福祉部少子政策課	子ども関係施設等で配布 HP
8	秩父市 父子手帳 育男（イクメン）	平成24 改訂	A5 45	秩父市健康福祉部子ども課	母子健康手帳配付時
9	千葉市 育男（イクメン）手帳	平成24	A5 30	千葉市市民局生活文化スポーツ部男女共 同参画課	母子健康手帳配付時、施 設等で配布 HP
10	長野県 ながのイクメン手帳	平成24	A5 37	第一企画（汐見稔幸監修） 長野県 ながの子ども・子育て応援県民会議	母子健康手帳配付時 HP
11	和歌山市 父子手帳Father's NOTE	平成24	A5 39+ノート	和歌山市子育て支援ネットワーク実行委員会 和歌山市	母子健康手帳配付時 HP

に取ってもらいやすく、親しみやすい文章表現、イラストなどの工夫がうかがわれた。発行は教育委員会、市や県、県の保健福祉部などの担当課名で、制作者名が別に記載されているもの、専門家の監修を受けているものもみられた。男性のみのプロジェクトチームで制作した例（資料7）もある。

配布方法は母子健康手帳配付時が最も多く9例、うち7自治体でHPからダウンロード可能となっていた。

目的としては父親の育児参加の推進が共通に掲げられているが、これに加え他県の発行を直接的な契機とした（資料6）、男女共同参画の推進を挙げている回答（資料9）もあった⁹⁾。

（2）父親向け育児雑誌『FQ JAPAN』

『FQ JAPAN』（2006年創刊、季刊）を取り上げた。創刊号から2011年秋号までの計20冊を分析対象とした。

『FQ (Fathers Quarterly)』は英国で2003年に創刊されており、日本の『FQ JAPAN』は、表紙写真が同じで、インタビュー記事なども翻訳して同じものが使用され、これに日本独自の記事が加わっている。表紙は映画ス

ターや、スポーツ選手、オバマ大統領のような子どもをもつ著名男性が飾っている。表紙には「UK発父親情報誌」、「男の育児バイブル」などとあり、日本の発行元のアクセスインターナショナルによれば5万部発行、価格は第9号まで580円、第10号以降は500円で、「男の育児online」も開設されている。

今回対象とした20冊の頁数は106～146頁となっていた。創刊にあたっての日本の発行人・編集長コメントでは、「父親の育児参加が、よりよい家庭を築く上で必要不可欠」であるが、「父親向け情報は非常に不足」している。そして、父親自身が育児に関する情報やシステムを共有できれば、子育てがもっと楽しくなるはずで、読者と共に考え有益な情報を届けたいという趣旨が述べられている¹⁰⁾。

4. 結果・考察

（1）父子手帳

1) 内容構成について

表2のように、6項目とその他の計7つに分類することができた。①妊娠・出産に関する内容（9冊）、②家

表2. 父子手帳の内容構成

資料	①妊娠・出産	②家事・育児	③育休等制度	④育児体験談	⑤記録欄	⑥施設・情報	⑦その他
1		○	○		○	○	
2	○	○	○	○	○	○	○
3	○	○		○	○	○	
4	○	○	○	○	○	○	
5	○	○	○	○	○	○	○
6	○	○	○	○	○	○	
7		○		○		○	
8	○	○	○	○	○	○	
9	○	○	○		○	○	
10	○	○	○	○		○	
11	○	○		○	○	○	

○・・・記述有

事・育児に関する内容（11冊）、③育休等の制度に関する内容（8冊）、④先輩父親の育児体験談（9冊）、⑤記録欄（9冊）、⑥施設・情報ガイド（11冊）、⑦その他（誤飲防止スケール、写真撮影術、アンケートはがきなど）となっていた。

各手帳により頁数も異なり、必ずしも同様の内容が盛り込まれているわけではないものの、上記のように共通する項目が多くみられた。家事・育児に関する内容、地域の施設情報については、今回対象の全ての資料に記載がみられた。また、記録欄が設けられている場合がほとんどであり、母子健康手帳のように子どもの成長後の活用可能性も考えられるものとなっていた。

2) 父親の子育てがもつ意義について

父親の子育てがもつ意義については、どのように位置づけられているだろうか。「子どもにとって」、「父親にとって」、「母親にとって」、「家族にとって」、「その他」に分類した。

内容構成には大きな違いがないのに対し、父親の子育ての意義については、全ての観点に関して記述がある場合、ほとんど記述がない場合と、大きな相違がみられた（表3）。ただ、読者である父親にとってもつ意義という観点については、8冊と最も多く記述がみられた。

具体的な「子どもにとって」の意義としては、両親から愛されている安心感に関するもの（資料1, 2, 8, 11）、子どもの社会性の発達（資料10）や思春期に相違が出る（資料3, 11）といった記述がみられるが、特に裏付けと

表3. 父親の子育ての意義（観点）

資料	①子ども	②父親	③母親	④家族	⑤その他
1	○	○	○		
2	○	○			
3	○	○	○	○	○
4			○		
5	○	○	○		○
6		○		○	
7		○			
8	○	○	○		
9				○	
10	○	○	○	○	
11	○				

○・・・記述有

なるデータなどを挙げているわけではない。

次に最も多くの資料で述べられていた「父親にとって」の意義では、子育てを行い充実した時間を過ごすことで、父親の人間的な成長につながる（資料1, 2, 5）、家事などの生活能力が向上すること（資料1）、仕事にも有益であること（資料6, 8）がみられた。

「母親にとって」の意義では、母親の精神的安定（資料3, 10）や父親への信頼感の高まり（資料3, 5）、家事・育児負担の軽減につながる（資料1, 8）ことなどが述べられていた。

このほか、「家族にとって」では、夫婦・家族の絆が深まり家族が育つなどとされていた（資料3, 6, 9, 10）。また、社会にとってもつ意義として、少子化対策（資料

5) や男女共同参画推進(資料3)もみられた。

3) 父親の役割や期待される行動について

父親の役割についての記述は、大きく4つに分類された。それは、第1に、妊産婦についての知識・理解をもつこと、第2に妻への精神的支援と家事分担、第3には、子どもの発達についての知識・理解をもつこと、そして子育ての分担である。

これらについて具体的な行動のレベルではどのようなことが述べられているだろうか。具体的な行動については、妊娠・出産・産後の時系列で記述されていた。

妊娠中については、母親の体調確認や母親の心身の理解とサポート(マッサージなども)が記述されていた。また、自分のことは自分で家事分担をして妻に負担をかけないこと、夫婦の会話や2人の時間を大切にすることなども記述されていた。胎児に語りかけたり、受動喫煙を防ぐという母子への配慮のほか父親教室、両親教室への参加をはじめとし出産の準備を行うように記述されていた。

出産前後では、立会い出産等出産方法の相談・準備、届出等の注意事項、産後の母親のマタニティーブルーや産後うつへの理解、性や家族計画に関する話し合いなどの記述がみられた。

乳幼児期については、子どもの様子をよく見ること、入浴、ミルクによる授乳・離乳食、おむつ替え、歯磨き、抱くこと・あやすこと、絵本を読んだり家の内外で子どもと遊ぶことなど日常的な世話と遊びについての内容が含まれていた。ほめる、叱るなどのしつけに関する内容もみられた。SIDS(乳幼児突然死症候群)や乳幼児ゆさぶられ症候群、事故防止、災害対応や応急処置など、病気や事故に関する知識・対応についても多くの資料に記述がみられた。

このように、妊産婦についての知識・理解とかかわり方、子どもの発達についての知識・理解とかかわり方が具体的に述べられている。注目される点として、「母親にしかできないことは母乳を与えることくらい」とする記述(資料2)や父親が「子育ての主役」(資料3)、父親の育児は「母親の手伝いではない」(資料5)などとして、母親の補助的な役割ではない父親観がみられたことである。

一方で、「ママを解放してあげる」(資料2)、「ママに

自由な時間を」(資料11)など、父子だけで半日、1日を過ごす試みの勧めが半数以上にみられた(資料2, 3, 6, 7, 10, 11)。こうした勧めは父親の育児参加を促す方法の1つと考えられるものの、子育てを主に担う一次的養育者としての母親の存在を前提とする記述が残り続けていることも事実である。なお、育児参加という用語自体、母親には用いられない用語であることから、近年その使用を問題視する指摘もある。

父子家庭に関する記述は特にないが、どのような家庭環境を前提とするのか、あるいは目指しているのだろうか。

女性の就労継続や男性の育児休業取得を進める施策の方向性、ワーク・ライフ・バランス(WLB)実現のための多様な選択肢の確保、多様な家族環境への配慮などは、こうした具体的な養育行動にかかわる情報のレベルにも反映されるように検討する余地があると考えられる。

(2) 雑誌『FQ JAPAN』

1) 記事構成について

2006年から2011年秋号までの計20冊を分析対象とした。

内外の著名人インタビューは創刊時から継続しており、第9号以降では「さらに読みやすくする7つのキーワード」として7つのマークが記事につけられるようになっている。それは「1. ライフスタイル」(参考にしたい、真似したい憧れの父親のライフスタイル)、「2. ファッション」(親子のファッション)、「3. 育児の基礎」(親として最低知っておくべき、育児の基礎知識)、「4. アイテム」(男としてホンモノを、父としてもつ育児アイテム)、「5. 健康」(父親のためのヘルスケア)、「6. ヒント」(独自の視点でアドバイス、タメになる父親のアイデア)、「7. ワークライフバランス」(仕事が忙しいからこそ、仕事と家庭を両立)の7点である。これらは編集の重要な観点であると考えられる¹¹⁾。なお、これらのキーワードは、1つの記事に複数付けられている場合もある。

この7つのキーワードも参考にしながら、20冊の紙面(2426頁)を9項目に分類し、ページ数の割合を捉えた。その結果、「特集」が16.7%、「育児用品」が16.3%、「父親論」が15.7%と高い割合を占めていた。「広告」は、15.0%で、「話題の父親インタビュー」が10.8%、「その他」(読者投稿、読者プレゼント、読者イベント)が10.9%を占めていた。このほか、「育児知識」が

5.1%、「子育て支援・WLB情報」が4.6%、「ファッション」が4.9%となっていた¹²⁾。

このように、前項の父子手帳とは異なり育児知識に関する内容よりも父親の生活、ライフスタイルに関する内容に重点が置かれている。読者イベントの紹介記事など読者父子・親子も登場している。広告はベビーカーやチャイルドシートなど親子の生活に関する商品が多いため、育児用品の記事と合わせ商品情報が多くみられた。

2) 父親の子育てがもつ意義について

父子手帳の分析と同様の観点から整理した。

「子どもにとって」は、父子の愛着形成のほか、子どもの個性を伸ばすといった点でも利点があるとしている。

子どもに与える良い影響については、後述の父親の役割、子どもに対するかかわり方のところで、父親ならではのという内容が豊富に記載されている。

「父親にとって」は、WLBについて試行錯誤すること、家庭生活の充実が仕事との好循環をもたらすなどとしている。生活時間についての記事（「超多忙DAD 6人の実例から「時間デフラグ」術を盗め」、第14号）では、職種も多様な男性が登場する中、「シングルファーザーは仕事と家庭両立の達人」であるとして全国父子家庭支援連絡会の代表で会社経営の男性が紹介されている。このように職種だけでなく多様な家族環境の父親が誌面に登場している。

また、「母親にとって」は、子育てする父親は、育児や家事のサポートだけでなく、妻を理解し、父親としてだけでなく友達、恋人でもあるのが理想だとされる。

「父親の育児は子どもの将来を、そして、夫婦関係をよりよくする」（第5号）。幼少期に子どもとかかわる時間が長い父親は妻との関係も良好になるとし、一方、「妻を恋人にする」（第12号）では、子どもに影響をもつ母親に愛される良い夫こそが、良い父親と認められるとしている。妻の本音や夫婦間の家事・育児分担の認識のずれなどについてもデータに基づいて触れられている。

このような夫婦・親子の相互の関係から、「家族にとって」は、家族に愛される父親が家族をハッピーにするとしている。その他、子育てを大事にしWLBの実現を求める父親は、働き方や職場を変える（第6号）という視点が明確である。

3) 父親の役割や期待される行動について

誌面でたびたび登場するのが「DAD」という言葉である。これは一言で表現するならば安定した経済的な基盤をもち、育児を楽しみ、家族を楽しませる、かっこいい父親である。

具体的には、まず第1に、子育てを心から楽しむ、子どもとまっすぐ向き合う、子どもの個性を伸ばす（自分の考えを押し付けない）父親であるとされている（第1号）。

第2に、それは家族から愛される父親で、「育児参加、夫婦円満、地域密着」が必要な3原則だとしている（第10号）。仕事が忙しく近隣との関係がとれない父親ではなく、地域の行事などにも参加する父親である。妻に対しては、育児のサポートだけでなく、育児をする妻を理解することができることが大事だとしている。子どもにとってかっこいい父親が、妻にとっても魅力的であると夫婦・親子の関係を捉えている。

第3には、自身の趣味を大切にする父親が、それを子どもと楽しんだり、豊かな環境を形成すること。また、子どもの遊びを子どもと一緒に楽しむ父親、自然とのかかわりも豊かな遊びの達人であることなども期待されている。このほか、子どもの将来に影響する力量をもつ父親で、「子供の将来は父親の賢さ次第」（第8号）では、家庭生活の基盤である住まいやエコに配慮することもできる父親が力量のある父親だとされている。

こうして、多様な職業・生活環境の父親の姿が視覚的に捉えられるようになっている。イクメンプロジェクト始動以降は、イクメンの語も頻繁に登場するようになり、関係官庁の担当者のインタビュー記事なども登場しており、国内外のWLB事情の紹介、職業人、社会人としての父親の生活が取り上げられている。

ここでのDADは、幼少期より母親とは異なる存在として様々な力量を発揮することを期待されている。高価な育児用品の紹介もあることから、経済的に安定した父親で、母親とは異なる子育ての機能を担う父親という、近年の教育雑誌で指摘される父親像に類似した姿もみえる¹³⁾。

5. まとめ

今回分析対象としたのは2000年代から2010年代の活字情報である。

対象とした2種の資料は、父親を対象とする点は同じ

であるが、公的事業による無料配布と有料で購入の雑誌であることで、想定される読者層も異なる。そして、父子手帳に限られたスペースで、地域の施設情報などを含みながら、家庭内での乳幼児期の育児知識・行動を中心として作成されているのに対し、『FQ JAPAN』は、育児知識の伝達よりも、家族関係や生活と仕事などの父親のライフスタイルに力点をおいていることがわかる。

一方で、この2種の父親向け活字情報において期待される父親像、養育者としての父親観には共通点がみられる。

すなわち母親の補助でない父親の子育てへのかかわりを期待する面をもちながら、何よりも子育てを楽しむことの大切さを重視していること、また、幅広い対象に向けて、できることからの参加を促す表現がとられることである。これにより、母親の子育てを前提に、母親のサポートをする父親の姿が払拭され難いという点である。国の「イクメンプロジェクト」でも、「子育てを楽しむ」ことが掲げられている。確かに母親の育児不安を問題として、母親についても「育児を楽しもう」という表現がとられることがある。そして、母親、父親間でも実際の育児状況でその受け止め方は異なると考えられる。しかし、父親向けの情報に位置づけられた主観的な「子育てを楽しむ」ことが、容易な「参加」を促す表現とともに、一次的養育者期待を不鮮明にする面をもつことに十分留意する必要がある。

また、父親自身にとってもつ子育ての意義が、父親自身のWLBのとれた充実した生活や成長などを中心に語られていることに注目したい。この点は、父親(男性)の権利としての子育てという視点をさらに明確にすることで一次的養育者期待と結びつく可能性をもつことが期待できると考えられる。

子育てに関するスマホアプリの開発なども始まったが、従来の活字情報の蓄積を生かし、多様な情報源と内容の検討がさらに必要と考えられる。また、父親対象、母親対象、両親対象という情報のあり方、対象の想定に関しても、一層の検討が必要と考えられる。その際、多様な生活環境や養育者のニーズに対し、無料・有料の情報源とアクセス可能な選択肢の検討・開発が必要であり、情報の受け手や支援の受け手であることから、自ら発信者となる親たちにも注目していく必要があると考える。

謝辞

保育学研究室の調査にご協力いただきました自治体子育て支援担当課の皆様には、心より御礼申し上げます。

注

- 1) 石井クンツ昌子 (2013). 「育メン」現象の社会学 ミネルヴァ書房
- 2) 汐見稔幸 (2008). 子育て支援、その成果と課題—少子化対策の意義と限界 汐見稔幸編 子育て支援の潮流と課題 pp. 3-17 ぎょうせい
- 3) 男の子育てを考える会編 (1978). 現代子育て考 そのIV—男と子育て 現代書館
男の子育てを考える会編 (1987). 男の育児書 現代書館
男も女も育児時間を！連絡会編 (1995). 育児で会社を休むような男たち ユック舎
- 4) 2010年6月、男性の子育て参加や育児休業取得の促進を目的とし厚生労働省が「イクメンプロジェクト」を立ち上げている。「イクメンとは、子育てを楽しみ、自分自身も成長する男性」であるとされている。「イクメンプロジェクトサイト」は、「イクメン宣言」、「イクメンサポーター宣言」、「イクメンの星」公募・選定・紹介など啓発活動を展開している。
- 5) 母子健康手帳を父親にも活用しやすくする取り組みとしては「親子健康手帳」(常陸大宮市)の発行などが注目される。「母子健康手帳に関する検討会」報告書(平成23年11月4日)によれば、主要な論点の1つとして母子健康手帳の名称について議論したことが報告されている。「父親の育児参加を促すために親子健康手帳等への名称変更が有効との意見があったが、妊産婦及び乳幼児の健康の保持及び増進の重要性という観点から、母子健康手帳の名称は変更しないことが適当と考える。なお、父親の育児参加を促進するためには、父親にも記入しやすい欄を設ける等の工夫を行うことが望ましい」と述べられている。
- 6) 各地の父親を対象とした子育て支援事業内容に関する調査研究が行われるようになってきている。
小崎恭弘 (2011). 子育て支援における父親支援プログラムの取り組み—全国子育て支援センターアンケート調査の結果より— 子ども家庭福祉学 11, 25-33

野津山希・佐藤勢子・中浜千明・青野篤子 (2011).

「男性の子育て」支援プログラムの実践的研究 福山
大学心の健康相談室紀要 5, 19-26

7) 男の子育てを考える会編 (1987). 男の育児書 現代
書館

汐見稔幸・長坂典子・山崎喜比古、(絵) 小泉るみ
子 (1994). 父子手帖 大月書店

8) 全国42県庁所在地および市町村51計93か所を対象と
した岡田らの調査によると、父親を対象とした子育て
ガイドブック (本稿での父子手帳) は20か所 (21.
5%) で発行されていたと報告されている。

岡田みゆき・伊藤葉子・一見真理子 (2014). 地方公共
団体における父親の子育て支援 日本家政学会誌 65
(10), 33-43

9) 資料1は、家庭教育手帳をベースとし高校生の時期
まで取り上げている点で、他の資料と異なる面がある
が、父親対象に、乳幼児期について記述されているこ
とから分析対象とした。

10) 発行人・編集長 清水朋宏 創刊号編集後記 (200
6).

なお、雑誌による読者データ (MEDIAPACK媒体資料)
では20代後半から40代前半の男性を主な読者層として
いる。読者アンケートでは、妻が専業主婦の割合が約
6割という結果 (2010年 FQ JAPAN調べ、第14号) が掲
載されている。

11) 7つの観点の表記は、当初の英語表記から、日本語
表記に変更されているが、内容的には同様である。

12) 目次ページはFEATURE CONTENTSとREGULAR CONTENTS
に大きく分かれ、前者のなかにSPECIAL記事が複数み
られる構成である。ここでは、前者の中のインタ
ビュー記事は除いて「特集」と分類した。

13) 天童らは、2000年代半ば以降に登場したビジネス系
父親向け育児・教育雑誌として『日経Kids+』と『プ
レジデントFamily』を取り上げこれらの雑誌言説から、
「子育てする主体」としての父親について考察してい
る。そこでは子育て・教育の役割の「再ジェンダー
化」が示唆されている。

天童睦子・高橋均 (2011). 子育てする父親の主体化
—父親向け育児・教育雑誌に見る育児戦略と言説—
家族社会学研究 23(1), 65-76